

平和モデルの創始者

一日一題

一九七二年七月、谷口澄夫岡山大学長と砂田輝武岡山大病院長らに見送られて、総勢二十八人の第一次岡山大医学部クワイ河医学踏査隊が岡山駅を出発した。活動場所は「戦場にかける橋」の上流、ミャンマーの国境地帯にあるモン族の開拓農場。農場主のヤップ氏は第二次世界大戦中、連合国側の少尉として抗日活動をしてい

AMD A代表

菅波 茂

た。

この農場の紹介者は、倉敷市在住の永瀬隆氏である。同大戦中に憲兵隊通訳として「戦場にかける橋」を含めた泰緬鉄道建設に際し、悲惨な出来事を目撃した「歴史の証言者」である。

悲劇を繰り返すまじ。永瀬氏の体験に基づき迫力ある信念と行動。三十五年間のお付き合いで理解した最大の転機は、敵味方

を問わない、犠牲者の鎮魂のための「クワイ河平和寺院の建立」だった。

八六年だった。タイの人たちの永瀬氏に對する態度が変わった。小乗仏教では「寺院の建立」は最大の徳を意味した。八八年には現地の貧しい人たちが看護師になるための奨学金として「クワイ河平和基金」を設けた。地元の銀行は特別の金利を提供した。永瀬氏が講演料などで惜しみなく注ぎ込んでいる基金は一億円以上。すでに二百人以上が卒業した。

AMD Aは災害被災者救援活動をAMD A多国籍医師団として九四年から行っている。サハリンでは残留日本人の社会的地位、パプアニューギニアでは敗走した日本軍の悲劇などに遭遇した。二〇〇〇年から「AMD A医療と魂のプログラム」を開始。戦争と災害による死者の鎮魂と関係者の医学生や看護学生への奨学金である。永瀬氏がつくった「平和モデルの普遍化」が、私のできる恩返しと想っている。